新刊紹介

For some in ancient books delight;
Others prefer what moderns write:
Now I should be extremely loth
Not to be thought expert in both.

平山玄著『同志社高商・商学部物語』

（葵産業経済研究所、B6判二五〇頁、二、〇〇〇円）

同志社大学名誉教授平山玄先生は、同志社高等高業学校の最後の教授で、高商が廃校となり商学部ができたあとも引きつづき教授をつとめ、在職三十五年ののち、ことしの三月定年退職された。平山先生は、この退職を機会に、高商教授の最終ランナーとして何かを残しておきたいとの意図のもとに、『同志社高商・商学部物語』を出版された。

B6版二百五十頁の写真入りで、これを出版されるについて、先生は古い樹徳会報や学校要覧を参考にし、それに十二人の高商生に会って在学時代の思い出を録音されている。したがって、高商史には生きた証言が随所に織りこまれている。

例えば、昭和十年同志社の屋台骨をゆるがせた神棚事件も、いまや遠く古い一つの思い出として埋没しようとしているやさき、当時の事件の内容が著書のなかで再現されているのは興味深い。

同じ年の秋の台風で倒壊した剣道場開きに、神棚を祀った。当時の剣道部長であり宗教部長のK教授が、神棚をみてびっくり、席を立って帰ってしまわれたことで問題が大きくなり、神棚をおろせ、おろさぬと、学内は二つの意見が分かれ、当時の師団司令部が来たり校長の進退問題にまで発展した。学生にすれば、当時の風潮として、武道場に神棚を祀るのは常識だったから祀っただけであって、キリスト教系学校で神棚をまつることは許されず、先輩から学校の規則にふれることはいけないとたしなまれ、うやむやのうちに神棚をおろしたことで問題は円満解決した。以上は一例にすぎないが、高商史は、いろいろな内外の変化に対して高商ボーイズがいかに感じ、行動したかの人間ドラマが内容となっている。

また、昭和十八年以降の経専・商学部史は、先生の経験と記憶をもとに書かれている。これは生徒の側からでなく、先生が教員の立場からみられた歴史で、経専、商学部物語りであって、いわば正史でなく外史である。

最後の五十余頁は先生の随筆が収録されている。

（船越精之助・樹徳会）

辻野功著『明治社会主義史論』

（法律文化社、B6版二二三頁、一、五〇〇円）

本書の著者は京都芸術短期大学助教授（同志社大学法学部嘱託講師）の政治学（思想史専攻）者である。本書の全体は二部に分

かれていて、社会主義、労働運動の「運動」篇と、片山潜、幸徳秋水、石川三四郎、安部磯雄の「人物」篇から成っている。

そこでまず著者は、社会主義運動の戦前の挫折を、主体的なブルジョア・デモクラシーの歴史的意義を評価してこなかった点に求めている。その議論はまた日本資本主義の構造分析で対決した戦前の「講座派」と「労農派」を想起させる。今後ブルジョア・デモクラシーの発展過程を実証する社会主義運動体の掘り起こしを期待したい。

また注目したいところは、労働運動と消費組合運動の結びつきの研究である。それは著者の片山・石川らの研究から必然的ではあるが、また著者の属する同志社大学人文研（「キリスト教社会問題研究班」）での共同研究の一つの成果でもある。

労働運動が労働者の社会的、経済的、政治的な自衛と独立をめざすものであるならば、彼らの生活権擁護のための消費（生活協同）組合の組織化が大きな戦略目標であったのは当然である。そこで片山は、資本主義経済から社会主義経済への移行期に、「制限社会主義」（七十五頁）としての非個人的な共働事業を求めた。これが、社会主義の実地練習であり、労働組合の事業でもある消費組合運動であった。それが彼らの平和運動への道を開いて賀川豊彦らに受け継がれ、小ブルジョアを含む生活権運動となったところは、さらに発掘してゆく必要があるだろう。本書に続く「大正、昭和の社会主義史論」が期待されるところである。

さて、第二部「人物」篇は著者の得意とするところである。ただ石川三四郎論の中で、「海老名弾正との関連として」対象的に述べられ、その海老名の戦争論が「霊的王国」では否定的に、「政治的国家」では肯定的（一六一頁）にとらえられているところは、海老名の精神弁証法史観の一元論からすればどうなるのであろうか。

この点は、著者の場合、最後の安部磯雄論にもみられる。安部が「精神的問題」と「物質的問題」を解決するものは、前者がキリスト教、後者が社会主義（根本的）と社会事業（応急的）であった、として「両者を別個のもの」（一九一頁）と見つつ、「人道主義という紐帯」（同頁）によって結び合っていると説明される。

さて彼の人道主義とは何であったのか。第二回普選（一九三〇年二月）後のこの社会民衆党委員長は、「私は社会主義を云うも、キリスト教を信じない人と私の考えは違う。」として、ロシア革命を批判し、「キリストの云った如く、剣をとる者は剣にて亡ぶるのである」（一九三〇年六月五日付「基督教世界」（週刊）四頁）と訴え、絶対的で宗教的な他者愛、そこから出る無抵抗主義をもって平和の政治と社会事業を求める。

第一回普選以来、当選四回の無産政党人として活躍するさ中にも、安部にはこのような政治哲学があった。「私はあくまで牧師である。（中略）かかる意味に於て私が教育家になったり、政治家になったりしたことは堕落ではない。」（一九三〇年五月十五日付同上紙四頁）とさえ説くのである。この神学的考察を抜いたところでみるかぎり、安部たちの社会主義は、真相を突かれぬまま、「社会ファシスト」呼ばわりで、それ以上は追跡、評価されないものなのである。いずれにしても、辻野氏の本書を通して啓蒙されることしきりである。著者の活躍を祈って筆をおく。

（武　邦保・女子大学教授）